

文字と言語文化（文化としての言語活動（ランガー ジュ））

著者	八杉 佳穂, Yasugi Yoshiho, ヤスギ ヨシホ
ページ	157-170
発行年	1984-02-10
URL	http://hdl.handle.net/10502/5558

文字と言語文化

従来、文字の研究は、文字の歴史の研究と文字の機能や構造、体系の研究の二つに分けられてきた。前者はいうなれば文字の通時的研究であり、後者は共時的研究といふことができる。しかし見方をかえれば、民俗学と民族学の関係から、一つの文字体系の研究と多くの異なった文字体系の比較、対照研究という二つの面が考えられるし、また文字というのは、いうまでもなく人間が自分たちの話すことばをなんとか書きとめようとしたものであるから、文字の研究には、文字そのものの研究に加え、文字と言語、文字と人間の関わり合いの三つの面があるとも考えられる。ここでは文字というものは、最後に挙げた三つの面から考察すべきと考え、それらをすべて含んだものを文字学ということにしたい。

文字そのものの研究とは、文字の発生と展開そして消滅という文字の歴史を主に扱う。しかし一つの文字の歴史、文字の比較による系統の研究ばかりでなく、文字の特徴や文字一般の原理なども取扱う必要がある。二つ目の文字と言語の関係の考察は、ふつう文字論と呼ばれる学問に含まれ、文字そのものの研究と交わる部分が多いが、特に、一つ一つの文字の体系を、言語との関連、すなわち

文字と音と意味の関係から考察する部門と考えたい。三つ目の文字を操る人間と文字との関係は、広義の記号論の分野にはいるであろうが、言語心理学や社会学、認識論などと深く関連している。文字使用の問題や宗教と文字の関係など、文字と人間の関係はすでに論じられてきたことは確かであるが、従来の文字学で論じられてきたことよりもっとたくさん考察すべきことが文字と人間の間に存在するように思われる。

文 字

まず文字そのものについてであるが、これについてはすでにたくさん書物がでていたので、くわしくは巻末にしるしたそれらの文献を参照していただくとして、ここでは、文字について最低限必要なことをまとめておきたい。

世界に文字がいくつあるかという間は世界にいくつ言語があるかという間とおなじくらい難しい。しかしだいたい四〇〇ほどとされている。それらの系統関係は従来の文字学の主領域であり、ほぼ確立されているが、問題は多い。その一例として、メソアメリカの文字をとり挙げてみよう。メソアメリカの文字の分類は難しく、ここにあげた図はあくまで試論にすぎない(図1)。というのも、メソアメリカの文字資料は時代のわからないものが多く、またほとんどが、暦や人物、場所の名を示す文字があることはわかるものの、少数の文字しか記されていない未解説のものだからである。絵の中に情報をこめているテキストや、文字といっても絵とかわらない具体的にかたどったものが多い。そのため

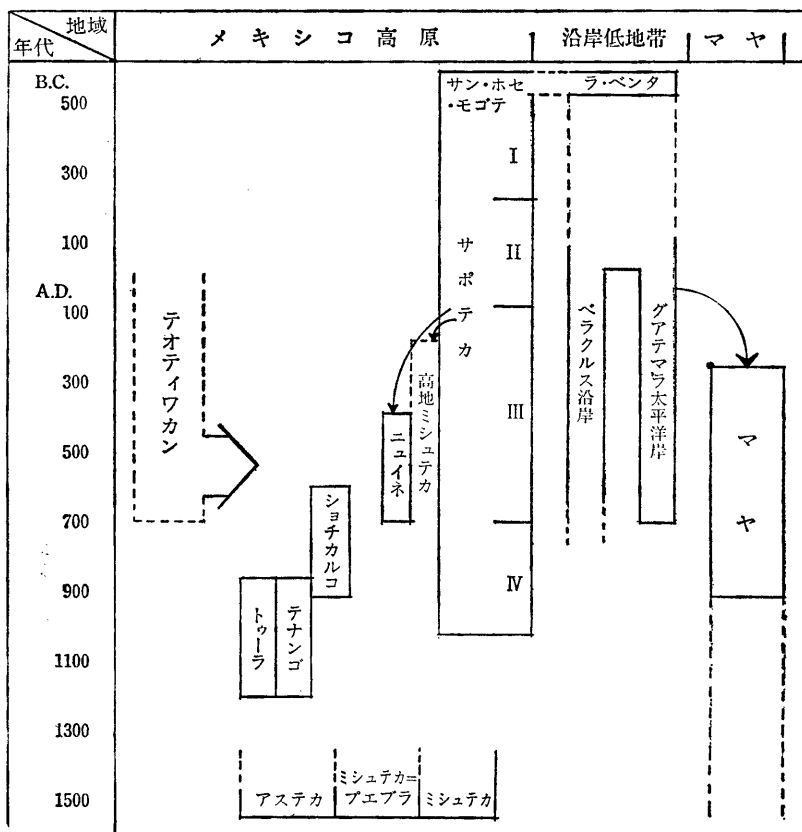


図 1

文字とはなにかという問題に直面することにもなる。

では文字とは一体なにか。いまここにある一定の大きさの、他と十分識別が可能なものが整然とならでいるとしよう。するとそれがいかに複雑であろうと、または絵そのものの羅列であろうと、人は直感的にそれを文字と感じるに違いない。なぜかといえば、言語は音の一次的な、線形的なつながりであり、それを表わそうとすると、どうしても線形にならざるをえないこと、また文字というものは大きさが一定であることを無意識のうちにも認めているからであろう。つまり、文字とは一定の形をもち、言語となんらかの関係を有するものである。意味をになっていると、それは表意文字と呼ばれ、語と関係があると、それは表語文字であり、音と関係があると、それは表音文字と呼ばれる。なお、文字ということはあいまいで、一つの文字をさす場合もあるし、文字体系をさす場合や文字全般をさす場合もあるが、ここではとくに必要な場合を除いて、区別をもうけないことにする。

文字の歴史、すなわち文字の一般的な発達過程は、絵図の形に近い具体的なものから様式化され抽象的になる。ところが(一)物の絵、(二)抽象的な概念を表わす絵、(三)語を示す記号、(四)音節文字、(五)アルファベットという道筋を想定した場合を目にすることがよくあり、それがあたりまえのことのようにとられている。なるほどアルファベット体系からみるとそうかもしれないが、単音文字であるアルファベットが一番発達した文字体系ということにはならない。世界の文字は絵図に近い具体的なものから、表意型と表音型の二つに分かれて発達してきたのである。その変遷の原動力は書記の省力化であり、また材料の変化、他文字文化の接触などが挙げられる。文字の羅列は線形で

あるが、文字のひとつひとつの形は二次元的である。それゆえ文字の歴史とは、その二次的なものを、言語の線状性にあわせる努力であったといえることができるかもしれない。

文字の特徴は言語を視覚化するところにある。言語の特徴のひとつである伝統的継承性をより確かにしたものということができる。そしてその機能は、基本的には伝達と保存にある。しかし文字には言語以上の象徴力や識別能力もあることもつけ加えておかななくてはなるまい。「ちょこれいと」と書いてあるのと「チョコレート」とでは感じがちがうし、「痔」は本来は「じ」であるが、やはり「ぢ」と書かねば感じがでない。「知る」を「識る」と書いて表わしたいことを文字で区別できるし、一行を行わずあけて書くことで躍動感を表わすといった試みも可能である。またたとえば「ケッセイタイリツ」という聞いただけではわからないことばも、「欠性対立」と漢字で書かれるとわかるように、これまでしらなかった概念なども漢字の造字能力のおかげで表わすことができる。また護符に文字が書かれていたり、命名のとき字画を気にする人がいるように、文字には神秘な力や魔力があるとも信じられている。

もう一つ、文字には忘れてはならない特徴がある。文字は場面を欠いたところに成立しているというのである。文字というのは、場面に依存しない、自己独立的なものである。これに対し言語は、話す人と聞く人のあいだに存在する場面または脈絡に大きく依存している。だからこそ、文を書くのは難しいのであろう。文を書こうとすると、まず場面設定から着手しなければならないし、筋道をたて、論理的に構成していかななくてはならない。講演や演説などの話が文章語に近くなってはならない

のも、同じ理由とおもわれる。言語学という学問が成立してきたのも、言語を文字におきかえた、つまり、場面依存の言語を場面から切り離し、客観化しうる文字という媒介物があつたからに違いない。

文字と言語

世界の文字はラテン文字、キリル文字、アラビア文字、インド系、漢字系に大きく分けられるが、言語との関係をみると、言語系統と文字系統は必ずしも一致しないし、言語構造に使われている文字がふさわしくない場合が少なからずあることがわかる。一般に一言語一文字がふつうである。しかしアラム語がアラム文字とくさび形文字を用いていたように、一言語多文字の場合があるし、歴史とともに文字をかえていったペルシャ語のような例もある。セルボ・クロアチア語のように、クロアチ人はラテン・アルファベットを、セルビア人はキリル文字を用いているような場合もある。また日本語のように、異なった文字体系の混合した書記体系を用いている言語もある。

一般に、絵文字は言語とのむすびつきがあいまいなものであり、文字はふつう表意文字と表音文字に分けられる。しかし、表意文字の代表的例として挙げられる数字でさえ、実際に文字として用いられるときには必ず音を前提にしており、表意文字と呼ばれている文字はあいまいである。そこでここでは次のようにみることにする。

表意文字：意味＋音　表語文字、表句文字（たとえば速記の文字）

キリル文字

現在のロシア文字の前身となつた文字で古代スラヴ文字ともいわれる。九世紀以降、キリスト教関係の古文書として残され、その言語は教会スラヴ語（または古代ブルガリア語）と呼ばれる。現在のロシア文字はもとよりギリシア文字との類似が認められるが、伝説によれば、ギリシアの司祭キリル（ギリシア名キュリロス）が兄とともにブルガリアでキリスト教の布教を行ないう。その時に制定したものと

表音文字…音　音節文字、単音文字

この二つは、見方をかえれば前者は総合的であるのに対し、後者は分析的な文字といえよう。またそれらは開かれた体系ということもできよう。しかし言語と対比させると、語レベルと音レベルのちがいがあることがわかる。それゆえ、両者は同じレベルで論じてはならないのであるが、たとえば英語では二六文字ですむのに、日本語では何千という文字を覚えなければならぬなどといったなきまじりの議論がおおまじめにおこなわれてきた。なるほど文字体系としては二六文字かもしれない。しかし表語文字と同じレベルの語の段階では、難しいつづりを覚えなければ一語だって書けないのである。事態は漢字とそれほど変わらない。

世界の文字は表意型と表音型に分かれて発達してきたと述べた。文字は言語を記述できるものと考えられている。しかし言語を表意文字だけで記すことは不可能に近い。たちまち固有名詞でいきづまってしまう。それゆえ何らかの表音文字を必要としている。しかし表音文字の体系であればあますところなく言語を記述できるかという点、そうともかぎらない。たしかに音声学者がやるように、音声記号で複雑な言語音もほぼ完全にちかいかい形で記述できる。しかしそれは実用的とはいえない。文字に表わす必要があるのは、音素である。それゆえ理想的な文字は音素文字と考えられるのであるが、たとえば日本語のた行をおもい浮かべれば、けっして音素文字が文字の理想ではないことがわかる。実際、世界の文字で完全な音素文字体系のものはない。かならずといってよいほど音素の数と文字の数は異なるし、ふつうアクセントや声調など記しはしない。

表音文字は言語の音声を一つずつひろっていけて、言語を記すのなるほど便利がいい。しかし文字というのは歴史をこえて残るものであるのに対し、言語というものは時とともに変化するものである。それゆえ表音文字であれば、時代とともに綴り字を変えていかなければ、表音文字といっても言語を直接表わすものといえなくなる。そうすると歴史を考慮にいれれば、かならずしも表音文字がよいのではないことがわかってくる。文字の元来の機能は表語であり、究極的にも表語である。それたとえば英語やフランス語の綴りの複雑さを思い浮かべれば、すぐさま納得いくはずである。

文字はかならずしも音と一対一ではなく、一般に多義で多読である。たとえば英語の a は [æ], [e], [ei], [a:], [a] と読まれるし、[i:] の書き方に me, fee など十一の書き方がある。表音文字といわれているものでさえこのように音と文字は一対一に対応しない場合があるわけで、その他の体系、たとえば我が国の文字体系などをみれば、文字の多義性や多読性がすぐさま納得できるはずである。

書きことばと話しことばは一致しない。人はみなしゃべることができるが、書ける人はすくない。またふつう書く機会はあまりないし、必要でない。一方書き方を習った人はみな自分の話していることばを書けるとおもっている。しかしじぶんの方言で書こうとするとたちまち困るはずである。書きことばはどの方言ともちがうのである。

話しことばには方言が多いが、書きことばにはほとんどない。もちろん color と colour の違いや峠に鯛や屹などの文字がある。しかし、そういう方言文字はわずかにすぎない。

漢字は中国語を表わすにふさわしい文字体系であるし、日本語の文字体系も日本語を表わすにふさ

ヒンディ語

インド共和国の英語とならぶ公用語でインド・ヨーロッパ語族に属し、その話し手は一億数千万人と推定される。北部インドを中心に東西方言があるが、標準ヒンディ語は西部で一八世紀ごろに用いられたカリボリー（標準語、のちにこの言語はヒンドスターニー語と呼ばれる）から発達し、古典語サンスクリットから多量の語彙を取り入れて一九世紀後半に成立した。文字はデーヴァナーガリーを用いる。

文字と言語文化

わしい体系であるように思われる。アラビア文字のように子音だけで言語を表現できる文字もある。つまり文字は言語を反映しており、また言語の影響をうけている。言語の影響は、文字を借用するとき顕著に現われるが、逆に文字が言語に影響を与えていることもたしかである。綴り字発音など、文字の言語への強制力はいたるところで観察できる。

文字と文化

漢字文化圏とかインド文化圏、アラビア文化圏というような分け方がなされることからわかるように、文化は文字とともに伝わり、文字は文化と密接に関係している。また文明の一条件として数えられることがあるように、文字はいわば、文化の象徴であり、文化の凝縮物である。

ヒンディ語はサンスクリットから借用したナーガリー文字を用いインド文化圏に属し、ウルドゥ語のほうはアラビア文字を用い回教文化のなかで発達してきた。両者はヒンドスターニー語という一つの言語の二種類の文字言語にすぎないのであるが、文化も異なっているのである。

文字は文化の高いところから低いところに伝わるのがふつうであるので、そうとはいえない例をここで付け加えておきたい。メキシコ高原のテオティワカンが高い文化を誇ったが、マヤのような発達した文字体系をもつことはなかった。にもかかわらず、文字をもっていたマヤ文明に影響を与え、マヤはとりいれた。一方文字をもっていたマヤのほうはテオティワカンに影響を与えることはほとんどなかったのである。

文字は宗教との結びつきも強い。アラビア文字はイスラム教と、ラテンアルファベットはキリスト教と密接な関係がある。おなじスラブ民族であるのに、ギリシャ正教はキリル文字を、ローマカトリックはラテンアルファベットの変形をもちいているように、おなじ民族であるのに宗教上のちがいが原因で別種の文字体系をもちいている場合もある。

動物、花、痛いなどの語彙は、見方をかえれば、あるまとまりを総称しているものであり、そのまゝのしかたが言語によってちがうところに注目したのが民族言語学とすると、文字というのは、言語をより一層抽象化したものであるから、まゝのしかたがより如実にあらわれていると予想される。

そこに注目すると、民族文字学とでもなづけられる分野が成立することになるが、いかんせん言語はすべての人類共有のものであるのに対し、文字を有する人々は限られている。それゆえその成立はあやうい。しかし自然に獲得したことはに我々の認識が深くかかわっているように、人間のこしらえた文字にも我々の認識が深くかかわっているはずで、その分析から得られる知識は多いようにおもわれる。

我々はサンズイとか木偏などを漢字の構成素とみている。しかし部首は見方をかえれば、漢字をつくった人そしてそれを使ってきた人達の世界の分類方法のひとつのあらわれとみることができ。現象を木の部類に分けたり、人や火や魚の部類に分けたその分類法が文字に反映しているのである。漢字を例にとれば、部首は二六一であるので（康熙字典）、それだけ世界を範疇化していることになる。それはなにも漢字にかぎらない。たとえば英語の例を挙げると、*man*などは人偏にあたるであろうし、

四一や^四や^四なども部首にあたるかもしれない。そのような見方は形態素と文字の関係を考えるうえでも、また分類法の参考にもなるはずである。

人は文字をどのようにみているのであろうか。人は木、林、森の字の構成素である木を大きさが異なるにもかかわらず、同じ木とみることができるのはなぜか。これは一つの文字についての、たとえば音韻レベルの問題であるが、一段上のレベルでは、漢字による熟語で読めなくても意味がわかるものがあるように、必ずしも言語的裏付けを必要としない場合もあるが、たちまち言語的な裏付けが必要となってくる。たとえば、「文字」と「文学」があると、前者を「もじ」と読み、後者を「ぶんがく」と読む。一瞬にしてそれらの文字を把握して意味をしり、読みを決めている。「文」をどのような仕組で区別しているだろうか。その仕組を考えるために、「関西大倉」という文字があり、それを読んだ経験をふりかえってみることにしたい。大きな文字なので最初からひろい読みしていき、「大」のところは、「だい」と読んだ。その次の「倉」にいたってはじめて、この語はたいへん特殊であるにもかかわらず、「大」は「おお」と読まねばならないことに気付いた。この経験から、人は文字を読むときには、言語に頼っているばかりでなく、言語に頼りながら行ったり来たりしながら読み進んでおり、決して線状的に読み進めているのではないと考られる。この問題をさらに考察することは、文字と言語の関係の側面に光を与えるようにおもわれる。さらに上のレベルでは、漢字とかなのまじり具合や句読点や段落の問題がある。

人はまた、文字を美しいと感じたり、醜いと感じる。これは美学の問題であるが、美しい文字が認

識でき、美しい文字を書きたいとおもってもそのとおりに書けないのはなぜか。文字にくせが生じるのはなぜか。おそらく見ているとおり脳では認識されていないのであろうが、そうした現象はいかに説明できるのであろうか。

また我々はよく読めるのに書けないということを経験する。それは、顔や車などはたちどころに識別できるのに、絵にかいてしめすことさえ困難であり、どこをもって識別しているのか定かでないといった現象と関係する。それは脳では書字と読字の分担域が違うことや、視覚による認識方法がほかの認識方法より数段すぐれていることをしめしているに違いないのであるが、そうした能力と文字使用の場合の認識のしかたの問題も、たいへんおもしろい分野になるはずである。大脳生理学や失語症の研究から表音文字と表意文字とでは脳の分担場所が違うらしいなど興味深いことがわかってきたが、文字の認識の問題は認識一般に関わる難しい問題であり、まったくいいほど研究されていない。

人類学者が選ぶ調査地は、ふつう文字のない社会である。調査をおこなうと必ずといっていいほど、対象の人々の話す言語をどのように記録していけばよいかという問題が生じる。おそらく言語学の素養をもった人なら音声記号で書いていくであろうし、そうでなければ、自分の習ってきた書記方法を応用するであろう。その際おそらくほとんどの場合、単音文字を使用するであろう。しかし対象の言語がCVCV形で音節文字が適切な場合や漢字かなまじりのような体系がふさわしい言語があるかもしれない。もしそれが発展してこの言語の書記体系の創造と結びつくようなことがおこるなら、

社会的、政治的な面の考慮とともに、文字と言語の関係や先程指摘した表音文字の不便さなどを一度考えてみる必要があるのではないだろうか。

文字のある社会では、文字体系はどのようにその社会にとりいれられたかをしる必要があるし、その文字体系が言語にあっているかどうか調べる必要がある。女文字と男文字のつかいわけのある社会もあるのだ、そのようなことも考慮にいれる必要がある。文字をもった人または社会と文字をもたない人または社会の違いの比較研究も必要であろう。書記体系の言語にあわせた改善という問題もある。

日本の文字は漢字、かな、アルファベット、アラビア数字という異なった文字体系を含む混合体系であり、我々は文字学の発展にふさわしい環境にあるといえる。認識の面、文字使用の面などから、いまいちど文字について考察しなおす価値がある。

〔参考文献〕

- * Diring, david 1962 Writing. Frederick A. Praeger, New York.
- 1968 The Alphabet: A Key to the History of Mankind. Hutchinson, London.
- * Geld, I. J. 1952 A Study of Writing: The Foundation of Grammatology. Routledge and Kegan Paul, London.
- * イグーネ、C (矢島文夫訳) 『文字』 白水社 昭和三二。
- * コントラートフ、A (磯谷孝・石井哲士朗訳) 『文字学の現在』 勁草書房 昭和五四
- * 橋本万太郎編 『世界の中の日本文字…その優れたシステムとはたらき』 弘文堂 昭和五五
- * ヒッカーソン、N・P (光延明洋訳) 『ヒトとコトバ…言語人類学入門』 大修館書店 昭和五七。

- * 樺島忠夫 『日本の文字…表記体系を考える』 岩波書店 昭和五四
- * ムーアハウス、A・C(ねずまさし訳) 『文字の歴史』 岩波書店 昭和三一
- * 中西亮 『世界の文字』 みずうみ書房 昭和五〇
- * 西田竜雄編 『世界の文字』 大修館書店 昭和五六
- * 田中春美他 『言語学演習』 大修館書店 昭和五七
- * 渡辺茂 『漢字と図形』 NHKブックス 昭和五一
- * 山口恵一郎 『方言文字』 『月刊言語』 二月号。大修館書店 昭和五八
- * 矢島文夫 『文字学のためのしみ』 大修館書店 昭和五二

(八 杉 佳 穂)